地域研究コンソーシアム賞

地域研究コンソーシアム（JCAS）は、その規約において「国家や地域を横断する学際的な地域研究を推進するとともに、その基盤としての地域研究関連諸組織を連携する研究実施・支援体制を構築することを目的とする。これにより、人文・社会科学系および自然科学系の諸学問を統合する新たな知の営みとしての地域研究のさらなる進展を図る」と述べ、それに続いて⑴共同研究の企画・実施・支援、⑵海外研究拠点の設置運営と国際的な共同研究・臨地研究の企画・実施、⑶研究成果の国内外への発信・出版、⑷地域研究情報の相互活用・共有化と公開という具体的目標を掲げています。

地域研究コンソーシアム賞は、上記の目標を達成する上で大きな貢献のあった研究業績ならびに社会連携活動を広く顕彰することを目的として授与されます。

第10回（2020年度）地域研究コンソーシアム賞 審査結果および講評

第10回（2020年度）地域研究コンソーシアム賞（JCAS賞）の授賞対象作品ならびに授賞対象活動について下記の通り、審議結果を発表します。

地域研究コンソーシアム賞の研究作品賞は、地域や国境、そして学問領域などの既存の枠を越える研究成果を対象とするもので、作品の完成度を評価基準としています。登竜賞も研究作品賞と同様の趣旨ですが、研究経歴の比較的短い方を対象としていますので、作品の完成度に加えて斬新な指向性や豊かなアイディアを重視して評価しました。研究企画賞は共同研究企画の活動実績、また社会連携賞は、狭義の学術研究の枠を越えた社会との連携活動実績を対象としています。

審査については、運営委員会が担う一次審査によって審査対象作品および活動を絞り込み、専門委員から、一次審査で絞り込んだ作品あるいは活動に対する評価を書面で回答していただきました。2020年度の専門委員は、研究作品賞については加藤聖文氏、川口幸大氏、喜多川進氏、木村健二氏、佐藤仁史氏、藤原辰史氏、登竜賞については栗本英世氏、清水展氏、長沢栄治氏、研究企画賞・社会連携賞については稲村哲也氏、岩本通弥氏、山泰幸氏にお願いしました。そして、一次審査の結果および専門委員の評価を踏まえて、地域研究コンソーシアム賞審査委員会（理事会）において最終審査をしました。この場を借りて、審査に関わってくださったみなさま、とりわけ専門委員諸氏に感謝申し上げます。

今回の募集に対して、研究作品賞候補作品13件、登竜賞候補作品20件、研究企画賞候

補活動３件、社会連携賞候補活動１件の推薦があり、一次審査によって絞り込まれ専門委員による評価の対象となった作品および活動は、研究作品賞３件、登竜賞３件、研究企画賞２件、社会連携賞１件でした。

多くのすぐれた作品・活動の推挙を感謝申し上げますとともに、受賞されたみなさまには心からお祝いを申し上げます。

以下は、各賞の受賞理由ならびに受賞作品・活動に対する講評です。

研究作品賞

田原史起 著
『草の根の中国――村落ガバナンスと資源循環』
（東京大学出版会、2019年）

本書は、著者自身の20年近くにわたるフィールドワークと、中国近現代史の歴史的文脈に対する透徹した理解に基づき、中国村落社会の特徴を「ガバナンス」というキーワードから理解することを試みた農村社会学的地域研究である。自然村・行政村レベルの基層社会という「草の根」の視点から、一見バラバラで自分勝手に見える中国農民の内在的ロジックを多面的に観察することで、新たな中国農民や中国社会像の提示に成功しており、今後の地域研究、特に中国をフィールドとする諸領域において参照されるべき重要な作品と言える。

何より特筆すべきは、本書が中国の北東部（山東省）・北西部（甘粛省）・東南部（江西省）・南西部（貴州省）の４つの調査地における現地調査データとマクロな統計データ、さらにはユーラシアの大国であるインドとロシアのケース・スタディを組み合わせながら、実証主義的な一般理解に挑んだ点であろう。通常、人類学的研究では前者、社会学的研究では後者に止まってしまうことが多いことを想起すれば、このミクロ・マクロの融合と地域間・国家間比較によって、中国農村社会の特質を「「つながり（血縁、関係資本、生得的）」と「まとまり（地縁、団結資本、創出的）」のコントラスト」、都市－農村間の不平等を棚上げしつつ、農村内／間の平等を重視する「「公平さ」のダブルスタンダード」および「脱政治化」として抽出した本書の功績は大いに評価されるべきである。

中国現代史における国家と社会の関係については、国家の社会に対する不断の浸透と捉えられがちであるが、本書では、毛沢東による急進的社会主義政策によって形成された都市と農村の二元構造によって、人民公社体制に置かれた農村がガバナンスの手法を発展させざるを得なかったこと、またそれが改革開放期の中国農村を強く規定していたことが示されている。一方、「出来事中心アプローチ」を採ることによって、中国のコミュニティを固い殻をもった静態的な存在として捉えるのではなく、イシューによって、異なる資源が動員され、様々な相貌を見せる伸縮可変な存在として捉えることにも成功しており、戦前からの日本の研究において大きな影響力を持ちつつも、必ずしも突破口を開くことができ

ずに停滞していた中国農村における「共同体」や「共同性」に関する議論に新機軸をもたらした。

今日の中国を理解するうえで、広大な国内の底辺を占める農村社会の実態把握が不可欠であることは言を俟たない。にもかかわらず、中国の農村社会に関する情報はこれまで、量が少ないうえに内容的な偏りも存在し、総じて「発展から取り残された悲惨な農村」というステレオ・タイプが支配的であった。しかしながら本書は、各地域の「村落ガバナンス」を統合的に描き出すにあたり、中国農村全体や各地域の歴史的背景の把握から始めて、各農村を取りまく気候、地形、風土などの生態環境、それらに規定される農業の形態や農家経済、出稼ぎなどの農外就業、市場経済の影響、そして政府の農業政策の変化までも射程におさめ、それぞれの地域で相対的に優勢なガバナンス資源を同定するとともに、村落ガバナンスの中国的なロジックを「資源循環モデル」として統合的に提示した。「ポスト税費時代」における村落社会運営の特質について、巧みな比喩を交えつつ、ガバナンス論を縦横に用いて照射し、中国農民のロジックに即した中国農村におけるガバナンスの特質を看破している。

事例の記述分析とそれに依拠した理論的展開の双方ともに充実した作品であり、地域研究コンソーシアム研究作品賞に値する。

●受賞者プロフィール

田原 史起（たはら ふみき）

東京大学大学院総合文化研究科准教授。博士（社会学）。一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了。専攻は農村社会学・中国地域研究。受賞作のほか、著書（単著）に《日本視野中的中国农村精英：关系、团结、三农政治》（山东人民出版社、2012年9月、1-274頁）、『二十世紀中国の革命と農村』（山川出版社、2008年4月、1-90頁）、『中国農村の権力構造――建国初期のエリート再編』（御茶の水書房、2004年、1-302頁）がある。

登竜賞

熊倉和歌子 著
『中世エジプトの土地制度とナイル灌漑』

（東京大学出版会、2019年）

本書は、アラビア文字手稿文書群の緻密な分析を通して、チェルケス・マムルーク朝からオスマン朝初期までの中世エジプト（14世紀末～16世紀半ば）における土地制度と土地保有状況の変化がエジプト農村社会に与えた影響を実証的かつ詳細に解明する一方、ナイル川の定期的な増水を利用した灌漑システムの実態をも明らかにし、そこで中心的な役割

を担った土手（堰堤）の位置を、GIS（地理情報システム）を用いて地図上に再現した労作である。現存しないチェルケス期の史料がオスマン朝初期の史料に引用されていることに注目し、それを手がかりに原状を復元する手法は卓越しており、地道な伝統的歴史学の方法論を現代的なGISの空間情報、さらには現地を自分の足で歩くフィールドワークの手法と融合させて、新しい研究手法の豊かな可能性を示した点も高く評価できる。その分析結果である伝統的灌漑システムにおける国家・社会関係に関する知見は、今日的な意味での水利用研究への示唆も大きい。

10世紀半ばのイラクに始まって、多くのイスラーム王朝に採用され、各地の統治システムの骨格を形成した土地制度（イクター制）は、14世紀前半のマムルーク朝エジプトにおいて精緻化され、頂点に達したと言われる。そこでは、君主が配下の軍人に職階に応じた土地徴税権（イクター）を分与する一方、軍人は軍事奉仕に加えて、徴税地の農業経営・灌漑設備の管理・治安維持に携わり、村落社会の形成に関与した。このようにイクター制は国家の統治基盤であったにもかかわらず、その詳細な実態については、マムルーク朝支配層が文書史料を多く残さなかったために、ほとんど不明であったところ、本書は16世紀の後継国家オスマン朝の文書史料の中にマムルーク朝期の土地記録が転載されているという、先行研究が気づかなかった点に着目し、古来の豊穣たる地域エジプトにおける支配国家交代の意味を土地制度の変容を通じて骨太に論じている。

さらに本書の著者は、土地制度と密接に関係する灌漑システムの実態を土地記録や水利記録に基づいて再構成し、ナイル川の定期的な増水を利用した灌漑にあって中心的な役割を果たした土手について、GISを用い、最終的には農村地帯を自分の足で歩いて地図上に再現した。この鮮明な可視化により、数世紀前の土手が湛水・灌漑した水利圏の多くが、現在のエジプトの行政区分に重なることが初めて知られるに至ったのである。

これらの事実を世界で初めて明らかにした本書の質の高さは圧倒的であり、国際的に見ても中東地域研究の１つの頂点と言えるだろう。以上の点から、本書は地域研究コンソーシアム登竜賞に値すると評価できる。

●受賞者プロフィール

熊倉 和歌子（くまくら わかこ）

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教。博士（人文科学）。専攻は歴史学（エジプト中近世史）。2011 年お茶の水女子大学で学位を取得後、日本学術振興会特別研究員（PD）、東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門特任研究員（U-PARL）、早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手などを経て、2018 年より現職。土地制度や水利行政の観点から国家とエジプト農村社会との関係について研究している。また、歴史学における分析手法の開拓やオープンサイエンスにも関心があり、共同研究（通称 Qalawun VR Project）を立ち上げ、エジプト・カイロのイスラーム宗教建築の VR ツアーやイスラーム建築史や中世エジプト史に関する学習コンテンツの公開も進めている。

登竜賞

友松夕香 著
『サバンナのジェンダー ――西アフリカ農村経済の民族誌』
（明石書店、2019年）

本書は、ガーナ北部の農村地帯における合計22か月におよぶフィールドワークに基づき、世帯レベルの生計活動を詳細に分析することで、男性と女性の「不可分な」生計関係とその展開を描き出し、開発政策が進展するなかで女性が直面する課題を綿密に検討した、優れた民族誌である。男性と女性の二項対立枠組みに依拠するフェミニズム論の限界を浮き彫りにするだけでなく、女性の解放を目指して女性たちの経済的な自立を支援してきた国際開発政策の再考を促す力作であり、人類学や農学（毎木調査含む）、農村経済などの学問分野を融合させ、質的・量的データを駆使した説得力ある記述は、学際的な地域研究の成功例として高く評価できる。また、序論で展開されている、国際社会によるアフリカ女性の「支援」に関するフェミニズム研究と国際開発政策からの批判的考察は、実証研究から開発に携わる読者にとって大いに役立つ論考ともなっている。

本書が焦点を合わせるのは、1970年代に始まるアフリカ農村経済の転換期であり、人口増加による土地不足とIMF／世界銀行の構造調整政策に起因する肥料価格の高騰によって、農業を生計基盤にしていた男性の経済力が徐々に低下していった時期である。結果として、日々の食材不足に悩まされた女性たちは、夫や兄弟など男性家族が地力回復のために休ませていた土地の一部を要求し、自分の畑として耕し始める一方、ほかの家の男性の畑の作物の収穫を手伝うことで分け前を要求するなど、自らの農業労働を強化した。けれども、より多くの作物を手に入れようとする女性たちの試みは、男性の農業収益を減少させ、男性が女性と子どもを扶養する能力をいっそう低下させることになってしまう。ここから明らかになったのは、資源配分の「男女格差」是正を女性の福利向上と結びつける国際開発政策の誤認と矛盾であり、1970年代に始まった女性の自立的耕作支援プロジェクトが、食料不足を補おうとする女性たちに大いに歓迎されてきたにもかかわらず、家族男性に対する女性の経済的負担（労働と支出）を増加させる事態に加担してきたという、揺るぎない事実である。言い換えれば、女性の自立的耕作を支援してきた国際ジェンダー政策は、実は女性たちに約束した福利の向上すら、もたらしては来なかった。

このようにして本書は、現場の視点に基づき、サハラ以南アフリカの農村女性をターゲットにした既存の国際開発政策を説得的に批判するが、議論の過程ではフィールドワークの生のデータと事例・エピソードが大量に紹介されており、本書が人々の暮らしの細部に目を凝らし、話に耳を傾けた誠実なフィールドワークの賜物であることは疑う余地がない。そのうえで、現実をできるだけ客観的に把握し理解するため、定量化できるものについては統計などの量的データを取得し、また農学をはじめ歴史や政治経済の背景にまで広く目配りして、学際的なアプローチを心がけている点は、地域研究コンソーシアム賞の趣旨である「学問領域の境界を越えた意欲的な作品」として高く評価できる。綿密なフィールドワークを通じた多彩なデータと深い洞察により、ジェンダー平等を普遍主義的に推進する論調の危険性を指摘することで、硬直化した現在のジェンダー政策に関する議論を次

のステージへと展開させる重要な研究と言えるだろう。

以上の点から、本書は地域研究コンソーシアム登竜賞に値すると評価できる。

●受賞者プロフィール

友松 友香（ともまつ ゆか）

愛知大学国際コミュニケーション学部准教授。カリフォルニア大学バークレー校政治学部を卒業後、JICA 海外協力隊員として西アフリカのブルキナファソで活動。ガーナ北部をフィールドに東京大学で博士論文を執筆し、2015 年に博士号（農学）を取得。日本学術振興会特別研究員、プリンストン大学歴史学部ポスドクフェローを経て、2020 年 4 月より現職。農業、環境、ジェンダーと開発をテーマに、民族誌学と歴史学の手法を融合させる研究をおこなっている。

研究企画賞

伊藤敦規
ソースコミュニティと博物館資料との「再会」プロジェクト

本プロジェクトは国立民族学博物館の国際協働研究事業に基づくもので、博物館の民族誌資料にソースコミュニティの記憶と経験を反映させるという、極めて意欲的かつ興味深い取組である。アーカイヴ化された資料を、調査のなされたソースコミュニティと「再会」させる試みは、単なる博物館のプロジェクトを超えて、民族学的資料として祖先らの記憶を「現在化」させる実践であり、極めて先端的な取組として高く評価される。

ある「もの」が民族誌資料として登録される場合、従来は文化的他者による「科学的」分類が行われ、そのものの物質的特徴と来歴を中心とする情報が付される傾向にあった。しかるに、国立民族学博物館は2014年、資料一点一点のドキュメンテーションに、収蔵機関の担当者のみならず他機関の専門家の知見とソースコミュニティの人々の記憶や経験に基づく見解を反映（フォーラム化）させるとともに、その記録をデジタルアーカイヴとして可視化して次世代への共有を目指す国際協働研究「フォーラム型情報ミュージアム」に着手する。

本プロジェクトはこの国際協同研究の一環であり、2019年度までに日米英の14機関と個人コレクターが所蔵する約2,500点の資料をソースコミュニティと「再会」させた。そこでは、熟覧者として参加した人口約12,000人の米国先住民ホピ22名が地元の文化的なルールに則った分類や名称で資料を再整理するとともに、収蔵機関に対して既存情報の正誤を指摘し、保管方法や公開範囲に関する要望を述べる一方、身振りや抑揚といった個性をともない、使用や制作といった個人の経験に左右される「もの語り」700時間近くをビ

デオカメラの前で披露したのである。この映像記録は、人類学・博物学における学術的な重要性をはるかに超えて、人類にとって圧倒的に貴重な試みと言ってよい。

ソースコミュニティの人々と博物館収蔵資料とを「再会」させる試み自体は、米国先住民に出自を持つ博物館研究者によって発案されたが、世界を見わたしても、ソースコミュニティの人々による自文化の語りという意味での「再会」を、この規模のデジタル映像アーカイヴとしてまとめ上げた前例は存在しない。加えて、「もの語り」のテキストは「ソースコミュニティと博物館資料との『再会』シリーズ」として出版され、ソースコミュニティの人々をはじめとする関係者との間で共有が図られてきた。本プロジェクトの成果はさらに、展示会での活用実績もあり、ソースコミュニティにおける伝統文化の復興教室に活用されるなど、効果はすでに多方面に及んでいる。子孫らを熟覧者に、自文化を「もの語り」するデータとそこで示された方法は、今後他館の指針ともなるだろう。

このように本プロジェクトは、博物館研究・デジタル技術と地域研究を結びつける実践として意義深く、新たな博物館のあり方等にも影響を与えており、地域や先住民族の「伝統」の復興・創生にも資する試み、人類学博物館を舞台とする地域研究の展開の好事例として、研究企画賞に値すると評価できる。

●受賞者プロフィール

伊藤 敦規（いとう あつのり）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館准教授。博士（社会人類学）。専門は米国先住民研究、博物館人類学。東京都立大学大学院社会科学研究科修士・博士課程修了。日本学術振興会特別研究員 PD を経て、2011 年 4 月に助教として国立民族学博物館に着任。世界の博物館が収蔵する民族誌資料をソースコミュニティの人々の記憶と経験によってリアニメイト（文化的生命力の回復）させ、その様子をデジタル映像協働民族誌にまとめながら、ソースコミュニティの伝統復興などに活用する取り組みを行っている。

社会連携賞

三村豊
笑う怒田プロジェクト

本プロジェクトは高知県長岡郡大豊町の怒田集落で行われた。「限界集落」という言葉が最初に使われた、過疎・高齢化が著しい地域である。もはや消えゆく運命にあるかのようなこの地域で、どのように笑って暮らせるのか。2016年から当該地域で行っていた研究が発端となり、文化資源に焦点を当て、地域に「笑顔」を取りもどそうとするプロジェクトが企画された。

具体的には、唄い踊り継がれた盆踊りを復活させるために、「新しい怒田集落の唄」をつ

くること。地域の唄は、その当時の生活や生業のなかから生まれ、受け継がれてゆく。消えゆく集落だからこそ、新しい唄、新しい文化が必要だと考えたからである。

そのためには、外部の力が欠かせない。高知大学地域協働学部の教員と学生、さらにミュージシャン、地域アートコーディネイター、映像作家などのアーティストがプロジェクトに加わった。高知大学がすでに、愛媛大学が主導する日本とインドネシアの6大学間でSUIJI（Six-University Initiative Japan Indonesia）コンソーシアムを形成していたことも大きかった。両国の学生が農山漁村に約3週間にわたって滞在、言語・文化・専門の違いを超えて、地域が直面する課題に取り組みながら共に学ぶという共同教育プログラムの成果を活用できた。以上の点から、本プロジェクトは社会連携賞に値すると評価できる。なお、今回の受賞者は三村氏個人であるが、活動そのものはさまざまな役割の多くの人が関わっており、またそのこと自体が重要である。異なる思考・価値観をもつ人たちが個別に活動を行っても、大きな知恵と価値を生むことにはつながりにくい。地域理解・他者理解は言うまでもないが、異なるものを「媒介」することが重要である。三村氏はコーディネーターとして、そしてプロデューサーとして、異質なものをつなげる知的作業を成し得ることができた。

プロジェクトでは四つの楽曲と映像作品ができあがった。こうした作品を制作するプロセスを通じて、怒田集落の人々は、埋もれかけていた自らの地域の「大切なもの」を再認識することになった。高知大学の教員・学生にとっては、具体的研究・学習成果となっただけでなく、研究・教育が一体となった長く続くフィールドを手に入れることができた。そしてアーティストにとっては、それぞれ創作活動に新たな発想と表現手法を身に着けることができた。

一人の研究者として三村氏の得るところは大きかったと思われる。それゆえ最後に、授賞にあたっての課題を提示しておきたい。研究者が、地域において研究者以外と協働することによってもたらされる「創造」について、共有できるように記録・ドキュメンテーションを行うということである。この社会連携活動が「研究」として蓄積され、別の地域において発展的に活かすことができるようになることを期待したい。

●受賞者プロフィール

三村 豊（みむら ゆたか）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所研究基盤国際センター研究員。専門は建築学（建築・都市史）。国士舘大学工学部卒業、同大学大学院工学研究科修士課程修了、東京大学大学院工学系研究科博士課程単位取得満期退学。総合地球環境学研究所では、2012年よりプロジェクト研究員（メガ都市プロジェクト）、研究基盤国際センター研究推進員を経て、2018年より現職。人口1000万人を超すメガシティから過疎高齢化する集落までを対象に人と自然が調和した暮らしの住まいについて研究を行う。

2020年9月30日

地域研究コンソーシアム賞審査委員会